松柏中学校アーカイブ通信　第17号　2024年9月13日発行

きらめきタイム「アーカイブコース」責任者：山村　好克
（タイトルの背景は旧校舎）

「てやてや」に見る松柏中の歴史（その２：手作りの技術編）

「てやてやウェーブ」本番、「ＬＡＳＴ　松柏」連がステージに上がったとき、司会の井上裕士さん（元愛宕中剣道部主将）と山岡恵さん（フリーアナウンサー）がこんなコメントをしていました。

> 「中学生の発想がすごい。」「派手な衣装をありがとう。」「この辺も自分たちで作ったのかなあ。」「何かね、この短冊（たんざく）に書いている言葉が『愛宕の連覇を阻止し、優勝する』って書いています。」「これ、校長先生のプラカード」「手作り」「（校長先生に）似てるのかなあ、侍をイメージしている。」

６月末の「てやてやウェーブ実行委員会」立ち上げの際、３年生リーダーをいくつかのグループに分けました。Ａ班は踊りを考える班、Ｂ班は衣装班で、Ｃ班は大道具担当。その他、演技指導班や広報班（クラスルームで参加の呼び掛け動画を配信する）、本番直前の気合い入れ班等々。司会者のコメントに対応させると、侍のポーズを入れるなど、豊かな発想で踊りを考えたＡ班、「松中てやてやＴシャツ」の上に羽織るハッピを製作したＢ班、まといや旗を製作したＣ班となります。

以下の文章は年寄りの固定観念かもしれませんが…。今の若者は、ＩＣＴ機器の操作やダンスにはたけている一方、細かい手作業をあまり経験していないという点です。実際、Ｂ班の衣装づくりは、本校の女性教員が女子生徒に縫い物の指導を行いました。Ｃ班は、地域から集まった段ボールからまといなどを作りました。ここでは男性教員が段ボールで大まかな形を作り、その上に新聞紙を水のりで貼って、コーティングしていく工程を指導しました。専門用語で言えば「張り子」「ハリボテ」づくりです。洗濯のりを水で溶いて、ぺたぺたと貼っていく作業を、中学生は初めて体験しました（左の写真は様々なサイズに新聞紙を切っている場面です。）

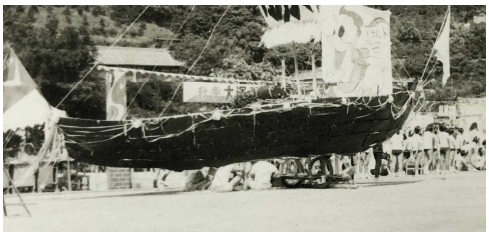
衣装も大道具も今やネットで注文する感覚です。今年度、旗も用意しようという意見が出た際、生徒はネットで一生懸命既製品を探していました。「違うんよ、布を買ってきて、自分たちでデザインするんよ！」…てやてや当日、生徒たちの自作の旗も立派にひるがえり、２本のまといも、３年生の決意の短冊を付けて、空を跳ねました。（長川さん、吉川さん、とても重かったようですね。午前中の練習でかなり疲れた様子でした。）

自分たちで作るという楽しさを大切にしてほしいですね。左の写真は1990年のときのまといです。うちわやプラカードも当時から自作です。そして今回も校長先生のプラカードが登場しました。段ボールに絵を描き、竹の支柱を裏張りしました。

そして運動会へ　つながる手作りの技術と楽しさ

てやてやの準備期間、何度も３年生に強調したのは、「この発想力や技術、集団を動かすノウハウは、必ず次の運動会に生かす」でした。さあ、いよいよ松柏中学校最後の運動会が迫ってきました。自分たちで材料や用具をそろえ、衣装や道具を作り上げていく伝統が、発揮されるときです。

昔は、リズミカルな応援やダンスはありませんでした。運動会の花形と言えば仮装とブロック席に設置する張り子やハリボテです。どうですか、下の２枚の写真。リヤカーを土台に巨大な黒船か何かですね。幕末がテーマのようですから。一方、仮装の方は、中学生でも政治性を帯びた風刺をしっかり表現しています。（「閉校記念誌」掲載予定の写真です。）



【1973年の運動会：ブロック席の黒船】

【運動会の仮装：「吉田外遊」（1954年ですね。）】